
迷い夜行—紅牢夢—

初瀬 泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷い夜行―紅牢夢―

【Nコード】

N5052Z

【作者名】

初瀬 泉

【あらすじ】

この世のあとあの世の境界、三途の川の中州にある常世の町。管理者の娘ユズリと、人を探して町に迷い込んだ遊佐が出会って一ヶ月。

町に出現した辻斬り。

それは生者死者異形の区別なく、ひたすらに血の雨を降らす。

序（前書き）

迷い夜行―紅牢夢―は『迷い夜行』、『迷い夜話』の続編となります。未読ですと不明な点が多くあると思いますので出来れば前作、前前作を読了後にお読みください。

序

御方様はわたくしには赤が一番似合うと仰って下さいました。おかたさま

御自分も赤が最も好きな色なのだ、とよく仰っておられました。

ですからわたくしは御方様の選んで下さる、御方様の愛する赤い衣がととても好きだったので御座います。

御方様がわたくしのために特別にあつらえて下さった、真つ赤な椿ちりめんの縮緬細工の髪飾り。

わたくしの肌によく映えると、真つ赤な紅をお取り寄せ下さいました。

そして赤紅あかべに、真朱しんしゅ、緋色しょうじょうひ、猩々緋きょうじょうひいろ、京緋色……。御方様は様々な赤の衣を仕立てて下さいました。

ですがわたくしに最も似合うのは純然たる赤だと御方様は仰いました。

赤は太古の昔より生命の色。

その色こそがわたくしに似合う、と。

お部屋には他にもたくさん赤いお道具が溢れておりました。御方様とわたくしはそこで赤というこの世で最も美しい色に囲まれ、幸せな時を過ごしたのでございます。

けれど下賤な輩は御方様の愛する赤で溢れる部屋を見ては悪趣味だと罵り、繊細な御方様を傷つけたのでございます。

お可哀そうな御方様。

ああ、どうかそんなお顔をなさらないで下さい。

貴方様にはわたくしが居ります。

貴方様の憂いを取り除くためでしたら、何でも致します。

だからどうかどうか、笑って下さいまし……。？

終幕のための開幕 1

三途の川の中州、生と死の境界。

そこには夜だけの町がある。

明けることのない常夜の町はあらゆる境界であるがゆえに曖昧だ。町は無数の橋によつて幾多の此岸しがんと繋がっている。だからここには様々なモノが存在する。生者も死者も異形も当たり前に行き交う。

ある者は死後、冥府に進むことを拒み。

ある者は生きながらに境界に迷い。

ある者は自ら選択して生死の概念すら曖昧な町に遊ぶ。

当代管理者の娘、ユズリは生きながらに町に出入りする人間だ。

そのため四六時中この町にいるわけにもいかず、此岸の生活に謀殺され町から足が遠のくことがなくもない。だがそうしているうちに、も町でも時は進み、時には町での生活に関わるような事件が起きていることもある。

それをいち早く知るには管理者である父・シノに聞けば話は早いのだが、管理者というのも暇ではない。ただ町へ行けば会えるとは限らず、冥府に呼び出されていればそうそう呼び戻すことも出来ない。

そうした時、町での情報を知るのに役立つのが瓦版かわいばんだ。江戸時代に見られた瓦版とほぼ同じもので、一枚の紙に時事性の高い最新情報から時には冥府からの御触れが記され、あちこちで売り歩かれる物。

町では最も人通りの多い大通りや、此岸との出入り口である橋の近辺に貼り出されたりもする。何しろ危険も多い町だ。情報は少しでも多い方がいいということで安価に情報を知ることが出来るため

重用されている。安価な分だけ裏通りをめぐらにする情報屋ほど詳細ではないが、わざわざ危険の増す裏通りにまで行きたい者にとって瓦版は欠かせない情報源なのだ。

そしてユズリもその安価な情報源をよく利用する。ガセネタやゴシップまがいの記事が少なくないでもないが、冥府からの重要な御触れなどは確実に知ることが出来るので、情報屋を頼るほどでもない時はそれで十分なのだ。

さて、そのユズリは毎晩のように町にやってくる時期でも、とりあえず瓦版が売られていれば周囲の購入者達の様子を見て面白そうなら購入する。

そして今日は橋を渡って町に入ってすぐ、瓦版を売り歩いている読売の周りには人だかりが出来ているのが見えた。

終幕のための開幕 2

「さあ冥府がついに本腰を上げた！ 既に被害者は十を超え、先日の代表者会議で代表者達に冥府からがお達しがあつたそうだ！ 何としても真赤姫まあかひめを捕縛せよ、そのための手段は問わず、場合によっては魂の滅絶をも許可すると！」

読売の声に周囲がざわめく。

当然だ。

魂の滅絶はこの町で定められた数少ない法の中でも第一級犯罪。

此岸で言うなれば殺人と同じ意味だ。

この町には生も死もない。つまり死ぬことはない。

理屈は分からないがこの町では生者も肉体ではなく死者同様、魂だけの存在となるらしい。普段は肉体の内側にある魂が町に立ち入った時だけ肉体を覆うように外側に出てくるとも言うのだろうか。

だからここではいくら肉体が傷を負っても致命傷にはならない。

町を出て此岸に戻ればいつの間にか魂は肉体の内側に戻り、ずっと内側にあつた肉体には傷一つついていないのだ。もともと、肉体は無傷といつてもそれは表面上のもので、その内側の魂は傷ついている。外科的には全く傷がないはずの肉体が魂に呼応するように痛みはする。けれどそれは肉体的には何の問題もない。此岸で病院に行つても原因不明と言われるだろう。まさか魂が傷つけられました、治して下さいと言つても治すことのできる医師は此岸にはそうそういないだろうし、そもそも信じてくれる医師がいるとは到底思えない。

そういうわけでこの町に死はない。いくら魂が傷ついても肉体が無事ならそれは死ではないから。冥府のいう死の定義は肉体の死なのだから。

だが死はないが、終わりはある。

魂を傷つけても死にはしない。

ただし魂そのものを再生不可能なまでに傷つけることはできる。
肉体に自己再生能力があるように、魂にもある程度の傷ならば自己修復する機能が存在する。ただしそれには限界がある。

魂の滅絶とは、その限界を超えるまで魂を傷つけること。自己再生も及ばない程に傷を負わせ、この世からもあの世からも境界からも消し去ること。

此岸で言う死が肉体の死を示すなら、この町で言う死は魂の死と言っているかもしれない。

魂が滅べば次はない。冥府に行つて罪を濯ぐことも、新たな生を受けるべく生まれ変わることもできない。

だからこそその重罪。

それを冥府が許可した。それは事態がそれだけ異常であることを示す。魂を殺し、冥府で裁きを受ける権利を奪い、あらゆる可能性を奪つてでも下手人を捕獲しなければならないと判断された事態。

幼い頃からこの町に出入りするユズリですら、そんな事例を目の当たりにするのは初めてだ。

初めてお目にかかる事態にユズリは少々の興奮を覚えながら人だかりを掻き分けながら読売へと近づいて行つた。

鬚^{まげ}を結つた読売は紙を片手に掲げ、話を続ける。

「始まりはこの町の裏通り、冥府にもほど近い暗闇で。冥府の把握する魂が七つ、一日の間に消滅した。冥府のお役人が駆け付けると辺りは血に染まり赤一色だったそう。辛うじて生き延びた二人の証言によれば、下手人は真つ赤な着物を幾重にも着た、まるでこそその姫御前^{ひめいぜん}のような若い女だったとか！　しかしその右手には血に染まつた刀剣が握られていたそうだ！」

辺りに恐怖と好奇の混じつた声が上がった。その中でユズリは息を飲んだ。

およそ一ヶ月前に町を訪れ、父の命令でここ最近ずっと行動を共にしていた男、遊佐^{ゆさ}。人形じみた風貌の彼は、人を探してこの町まで来たと言つた。

——多分、高確率で赤い打ち掛けを羽織っている。

——それから柄が赤い脇差わきざしを持っている。多分抜き身だろうな。初めて会った時に彼はそう言った。

赤い着物、赤い脇差。

それは読売の言う下手人の風体に一致する。

ユズリは気が逸るのを抑え込みながら読売の話の続きを待った。

終幕のための開幕 3

「しかしそれでも行方も素性も杳として知れない。冥府から派遣されたお役人と番所が総出で調査を開始したが、下手人の影も形も掴むことは出来ない。そうこうしているうちにまたこの裏通りで魂が五つ、消えた。今度は生存者もない、目撃者もない！ 誰ひとり生き延びることも出来ずに赤い血の海だけが残されていた！ そしてまた起きた！ 一つ魂が消え、五人が重傷を負いながらも生き延びた！ 五人の生存者兼目撃者によれば、下手人はやはり赤い着物の女だと言う！ そして冥府はその顔すら分からぬ赤い着物の女を真赤姫と呼び、第一級犯罪をたやすく犯す恐ろしき大罪人として町全体に厳戒令を発した！ 腕に自信のない者は裏通りへは近づかぬよう、自信のある者は代表者達に助力するか真赤姫の情報を集めるようにと！ さあこれが真赤姫の人相書きだ！」

そして読売は手にしていた紙を勢いよくばら撒く。

落ちた人相書きを拾う者、より詳細な情報を知る者はないのかと読売に詰め寄る者などで周囲はさらにごった返した。

小柄なユズリは人ごみに飲まれながらも何とか読売のもとまで辿りついた。

「人相書き、一部ちようだい！」

何とか人ごみを掻き分けて読売の前まで出ると、読売が驚いたような声を上げた。

「おや、ユズリお嬢さん。珍しいですね、お嬢さんがわざわざ自分からあっしの元までいらして下さるとは」

確かに、いつものユズリなら人が減るのを待ってから管理者の娘という立場を大いに活用し、瓦版が既に品切れとなっても強引に刷らせて自分の元まで持って来させている。

だが今回はそんな時間すら惜しい。

父の口車に乗せられ此岸の時間において早一ヶ月。いい加減何か

しら遊佐の探し人の手掛かりでも掴まねばまたからかいの種にされるに決まっているのだ。

手掛かりがあるなら一刻も早くそれを受け取り、探し人とやらを探して遊佐の前に引つ立てなければ。

「いいから、一部ちようだい。真赤姫とやらの人相書き」

肩で息をし、乱れた髪を直しながら読売に手を伸ばす。

「へい。これでさあ」

そう言つて読売が差し出してきた紙にはまるで浮世絵のように鮮やかな絵が描かれていた。

そこには赤い衣を幾重にも纏い、その手には日本刀らしき刀剣を持った女が描かれている。そして刃は決して長くない。

ユズリは人相書きを受け取り、読売を見た。

「この下手人が持つている刀剣は、目撃者の証言を元に描いたの？」

「そうらしいです。この町には色んな種類の刀剣があるでしょう？」

何でも冥府のお役人が金物屋の旦那の店へ目撃者を連れて行つて、

真赤姫が持つていたのに一番近い刀剣を探させたとか」

「八卦院はっけいんの店へ……」

様々な世界の武器が横行するこの町では刀剣と言われただけでは特定は難しい。だが八卦院の店なら町中のありとあらゆる武器が揃っている。そこで最も近い形の刀剣を探し、その刀剣がどの此岸の物なのかを検証するだけでも下手人の素性に繋がる可能性は高い。

「つてことは、八卦院のところへ行けばもう少し詳しくわかるかもしれないってことか」

「ユズリお嬢さんも真赤姫の捕縛に名乗りを上げるんですかい？」

シノの旦那が心配しますぜ？ あつしもこの町じゃ長いが、魂の滅絶なんてえ大罪をこんなにも多く犯した馬鹿は聞いたことはねえ。

冥府も相当危険視しているようですし、お嬢さんも今回はやめておいたほうが……」

「何よ。私じゃ他の代表者に、折継おりつぐとかにまで劣るって言うの？」
心配してくれることには感謝するが、折継の下に置かれることは

我慢ならない。

「い、いえ、そういうわけじゃ……」

読売は慌てて目を逸らし、「お嬢さんはお強いですから心配いりやせんでしたね」などと言いながら別の連中に人相書きを配り出した。

ユズリは人相書きを折り畳みながら人だかりを後にした。

まずは遊佐と落ち合うのが先決だ。件の真赤姫が本当に遊佐の探し人かどうかも現状では不確かなのだから。一人意気込んで行って別人でしたでは笑い話だ。

終幕のための開幕 4

遊佐も最初に町に足を踏み入れてから一日も休みなく町に通つてくる。今日がその例外となる日でなければだが。彼とは特に待ち合わせをしているわけでもないのだが、大抵彼は大通りか橋の付近の預かり所にいる。

預かり所はその名の通り、この町の物を此岸に持ち出さないために町で得た私物を次に町に戻るまで預かってくれている場所だ。冥府直轄であるため対価を求められないのもありがたい。

ユズリは町で得た玩具や武器の類、最近は不本意ながら折継からもらった太刀も預けている。同じく遊佐も火縄銃と火薬等武具類を預けている。

今日はつい瓦版に目が行ってしまったが、本来なら町に入つて一番に行くべき場所だ。何しろ預かり所に行つて武器を手にするまでは、こんなにも危険な場所を丸腰で歩かなければいけないのだからたとえ大通りと言えども、どこにどんな危険な輩がうろついているかもわからない場所なのだ。さすがのユズリも武器なくしては大きな顔をして町を歩こうなどとは思えない。ましてこれから冥府も危険視するような輩を相手にしなければならないのなら。

ユズリがいつも使用している預かり所は、いつも此岸と町とを行き来している橋の側の小さな店だ。「預」とだけ書かれた暖簾のれんを潜ると、天井まで壁一面に箆たんすが置かれているだけで他には何も無い、決して広くはない屋内に先客が一名あった。

「遊佐」

ユズリが声をかけると先客は振り返り、ややあつてから「ああ」と無感動な声を上げた。

「もう来ていたのか」

「まあね。あ、ねえ。あんたは今日の瓦版を見た？」

「いや」

遊佐は無表情に首を横に振った。

遊佐の顔の造作は人形浄瑠璃の頭かしらのように整っている。その上彼はあまり感情を表に出す性質ではないのかあまり表情を崩さず、それが余計に人形めいた印象を与える。左耳に一つだけ開けられたピアスだけが唯一、その人形めいた印象から浮いているくらいだ。

「刀狩りの番付でも出ていたのか？ 好きだな、本当に」
少しばかり呆れたように遊佐は言ってきた。

「違うわよ。刀狩りは確かに好きだけど。そうじゃなくてあんたにとつてももしかしたら重要な……」

「お待たせ致しました！」

ユズリの声は妙に明るい声によって遮られた。
明るい声だけははつきりと聞こえるが、その声の主の姿はどこにもない。今屋内にいるのはユズリと遊佐だけだ。

だが声ははつきりと屋内に響く。

「遊佐殿から預かりましたお荷物は改造火縄銃が一挺じやうてい、火薬が二袋、弾丸が一袋。間違いはありませんか？」

「ああ、間違いない」

箆笥のほうを向いて遊佐が答えると、壁一面にある箆笥の引き出しの一つが飛び出すように開いた。中には遊佐の荷物が一式。

遊佐が確認するように一つ一つ手に取っていくのを横目に、ユズリも箆笥へと声をかける。

「私も荷物を受け取りたいんだけどお願い」

「ああ、ユズリ殿。本日はどのお荷物を必要とされますか？」

やはり箆笥から声が返ってくる。

「太刀たちを一振り。牡丹と蝶の細工の鐔つばのもの」

「承知致しました。少々お待ち下さい」

そして声が聞こえなくなる。

静かになった屋内、隣で荷物の確認を終えたらしい遊佐がぼつりと呟く。

「いい加減慣れてきたけど、何と言つか……物凄いやな。箆笥が受

付って」

「箆笥って言うんじゃないわよ。ハシキは姿こそ箆笥だけど、一応彼女も女性なんだから失礼な言い方するんじゃないわ」

預かり所の番人、ハシキはこの屋内の壁一面にある箆笥そのものだ。

さすがに姿かたちは箆笥なので自分で歩いたりできないが自我を持ち、会話をすることもできる。そしてその性別は女らしい。

荷物を預ける時は名前を告げれば丁寧に対応し、屋内においておけばいつの間にか箆笥の何処か……ハシキの内部らしいのだが、そこに収納されている。そして受け取る時も名前と必要な荷物を言えばやはり丁寧に対応した後、いつの間にか屋内にその荷物が置かれている。

確かにユズリ自身、当初はかなり違和感のあった光景だったがハシキは町では珍しいくらい善良でよく気も効くため、他人の好き嫌いの激しいユズリも彼女には好意を持っている。

終幕のための開幕 5

「お待たせ致しました、ユズリ殿」

その声がすると同時、箆笥の引き出しが一つ飛び出してくる。中には豪華な造りの太刀が一振り。

「そちらの刀でお間違いないませんか？」

ユズリは太刀を手に取ると、しげしげと上から下まで眺め、鞘から引き抜いた刀身も確認してから大きく頷いて答えた。

「うん、大丈夫。ありがとう」

「いつもご利用有り難うございます。お二人とも、お氣をつけて行つてらっしゃいまし」

ハシキの明るい声を背に、ユズリは遊佐と連れ立って預かり所を後にした。

「ああ、やっぱり刀を手にとると、町を歩いているって氣になるわ」
左手に太刀の重みを感じながら歩くと、ようやく少し氣を楽にして町を歩けるようになる。

「さすがの私もね、丸腰でそこのゴロツキ相手にしようとは思えないわけよ」

先日手にしたばかりの太刀は、ユズリが以前から目をつけていた代物だ。刃紋はもんから鐔の装飾、柄や鞘に至るまでこれ以上ないほど好みの代物だったのだ。一度は折継の手に渡ったものだが、彼の氣まぐれのおかげで件の太刀はこうしてユズリのもとにやってきた。

折継のお下がりというのは氣に入らないが、実際にこうして手にしてしまうとそんな些事はどうでもよい氣になってくる。

「この刀はもともものすごく私好みの外觀なんだけど、実際に使ってみるとこれが運命の出会いって言うんじゃないかというくらい使いやすいし」

「その結果、刀狩りの番付も上がりましたってか」

無感情な遊佐の言葉にユズリは顔をにやけさせる。

「こんなに使い勝手も装飾も好みの刀だもの！ 刀狩番付で折継のバカを下すくらいしなきゃ、この刀に失礼じゃない！」

力説すると、遊佐は少し引いたように呟いた。

「……前から思ってたはいたが、ユズリは刀マニアなのか？」

「何よ、悪い？」

「いや別に……ただ刀の話になると、いつもとノリが違うよなーと」
「当然よ！」

刀の、特に日本刀の美しさは芸術の域だ。

少しずつ異なる刃紋の多様性、研ぎ澄まされた刃の幽玄の美、そして危ういまでの鋭さもさることながら、鐔や柄、鞘の細部にまで職人が妥協なく己の業を振るう。

「こんな芸術を前に、興奮しないわけがないじゃない！」

拳を握りしめながらそう力説すると、遊佐は「はあ………そうなのか」とつまらない返答を寄越したきり黙った。

自分から聞いてきたくせにその反応は何なんだと怒りなくなったが、刀の話で思い出した。

「そうだ遊佐。これを見て」

「何だ？」

遊佐に差し出したのは先程読売からもらった人相書きだ。

人相書きに視線をやりながらも最初は気のない風だった遊佐の表情が少しずつ強張っていくのがわかった。

「それは今、町で魂の滅絶っていう第一級犯罪を重ねている辻斬りの人相書き。人相書きって言うよりは絵姿だけど。下手人の素性は全くの不明で、被害は恐らく町の歴史に残る規模。調査に冥府から役人も派遣されているし、代表者達にも捕縛令が下ったそうよ」

遊佐は人相書きを目にしたまま答えない。

「下手人はその赤い着物を着ていたっていう外見くらいしか手掛かりがなくて、町では真赤姫と呼ばれている。冥府は真赤姫の捕縛に本腰を入れ出して、真赤姫の捕縛に限り、代表者達に魂の滅絶を許可したそうよ」

じつと人相書きを見ていた遊佐が顔を上げた。

その表情はやはり人形のように、何の感情も窺えない。無表情のまま、遊佐は静かに口を開いた。

「こいつだ。俺が探していたのは」

静かな、不安になるほど静かな声で遊佐は言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5052z/>

迷い夜行—紅牢夢—

2011年12月28日22時46分発行